

ケータイは伝達でなく接続ツール？

「一人で学食には入れない」「昼食をトイレで食べる」これは、NHKの「特報首都圏」での普通的女子学生の発言である。BSフジのプライムニュースでも同様の問題が扱われていた。びっくり仰天。『友だち地獄―「空気を読む」世代のサバイバル』（土井隆義著 ちくま新書）『近頃の若者はなぜダメなのか―携帯世代と「新村社会」』（原田曜平著 光文社）を紹介する。前著は筑波大大学院教授、後著は博報堂社員で両者とも若者研究の第一人者である。土井は、かつての青年は見られることに不満を感じ、現在の青年は見られない不安に怯えているという。なぜか。今日の若者は自己肯定感が脆弱なので、仲間内の承認なしには安定感を得られないのだ。だから、何よりも対立の回避を最優先する。つまり、相手と積極的にかかわることで相手を傷つけてしまうことを恐れ、同時に自分も傷つけられてしまうことを危惧する。そこに「優しい関係」が生まれ、内閉化した関係を維持するために神経をすり減らしている。ある中学生は「教室はたとえてみれば地雷原」と川柳で詠んだ。そういえば、「Aとか」、「～みたいな」といったボカシ表現が一般的になっているし、「KY」を知らない大人もいなくなった。先の発言は友だちがいないと思われたくないという事からの行動のようだ。「私のケータイのメルアドは700件しか入らないので買い替えた」という女性がいた。アドレスを交換できるのが

友人の多さの証明なのでメルアドの数量を競う。親密さの度合いは「即レス」（即返信）で測られる。四六時中ケータイを握って離さない高校生の理由が分かった。

ケータイを通じて「つながる」ことを求める現在の若者たちを原田は「新村社会」の住人と呼ぶ。彼らの築く巨大ネットワークは瞬時にして情報を伝達していく。そこではある種の「監視社会」が成立し、互いに顔色をうかがいあい「読空術」を駆使して協調性を保たなければならない。万が一ここに成立する掟を破ろうものなら学校裏サイトなどネット上に「晒される」という村八分が待っている。原田はこの「村社会的な人間関係」の復活こそがケータイ問題の核心だという。

また、「優しい関係」を維持するためのコミュニケーションは物事の善悪より「空気を読ん」だり「いい感じ」という身体感覚が優先される。「むかつく」という生理現象を社会的或いは心理的な「状況」に対する不快感や嫌悪感を表わすコトバにまで敷衍し、多用する。脱社会の視野だ。「やばい」が<すごい>、「鳥肌が立つ」が<感動>に読み替えられる。

これら「優しい関係」や「新村社会」の成立、脱社会意識の蔓延などは、今日の学生運動の成立しない状況と何か関係があるのだろうか。

えっ、私も「感動して鳥肌が立った」って言うよ。それって、ヤバくね？他人ごとではないのです。（文責：橋本）